戦中戦後の箏曲界と戦争体験
ー箏屋「琴伝」畑伝兵衛氏の記憶ー

畑　伝兵衛

戦前までの箏曲界

箏は古代よりすでに大陸から伝わっていた楽器ですが、元禄時代に八橋検校という人があらわれ、それまで宗教音楽として限られた場での演奏から、俗箏として一般の子女などにも普及させたことが、今日のように広まった始まりです。その後、文化文政時代に松浦検校や菊岡検校などすぐれた作曲家による地歌三味線の数々の名曲がつくられました。また、八重崎検校などが、それらの曲に合う箏の手付をして、歌と器楽とが一緒になり、箏と地歌三味線の合奏形式を形づくり、さらに幅を広げました。それに対し、長唄をはじめその他の三味線音楽は主に歌舞伎の伴奏など劇場音楽として発展してきたことが、箏曲ほど一般の演奏者人口を増やさなかった理由の一つといえましょう。

邦楽人口の割合としては箏曲がほぼ5割だと思います。3割が長唄で、あとの2割がその他の邦楽です。日本の古楽器の5割までが箏に属するといえるでしょう。管楽器とあわせることも明治以降ですが、成功しています。

戦前、箏の師匠は、東西ともに盲人の先生に有力な演奏者が多く、門下生も多数いました。玄人と素人とは、入門の時から別れていましたが、昔は盲人の先生につく場合、晴眼の玄人の内弟子は入門する時から「請人」がいりました。なぜかというと免状金や月謝などの金銭を、家庭の子女が持ってくるので、金銭のトラブルを防止するためです。師匠も弟子も目開き同士のときは、請人はいりません。そういった弟子の月謝や免状代の納入が生活の支えとなっていました。弟子には一般家庭の女性の割合も高く、明治から大正にかけて、女性には、嫁入りの三つ揃いとして、お花・お箏・お茶の三つがたしなみとされていました。一般的には、先生は自分の演奏を主力にし、1年に1回ぐらいの割合でおさらい会をしたようですが、弟子の養成は厳しく、素人の門下にも立派な演奏者を輩出していました。最初から基本が上手な先生についていますと、お弟子さんも上手になります。素人本位の先生は、生徒に一生懸命に教えるので、サービスがよかったともいえます。

しかし昔は、お弟子さんの数が今の30人も50人もというほど多くいるお箏の先生はありませんでした。

召集で中国へ

わたしは昭和8年に徴兵検査を受けて、学区でたった一人の甲種合格でした。昔はよっぽど体がよくないと甲種合格になりません。現役兵として、昭和9年1月に神戸に集められてそこで防寒着と防寒靴を渡され、朝鮮に行きました。その後5月に千葉の四街道にあった砲兵学校に派遣されましたが、翌10年8月に再び朝鮮に戻り、11月に除隊しました。

昭和12年になり、7月7日に支那事変（日中戦争）が起きます。7月20日に、学校で防空演習の打ち合わせがあるというので、そのとき母親は寝ていたのですが、行きました。防空演習の打ち合わせを学校でしていましたが、「今日招集令が出る。」と言うので、「招集令て赤紙か。区役所へ聞きに行こうか。」ということになりました。兵事課に行ったら「今晩招集令出ますねん。数は多くないんですけど。」と言われて、学校の用を済まして帰ってきました。帰ってきたら、向こうから区役所の兵事課長が紋付羽織袴を着て高梁提灯を持って来るわけです。「なんやねん。」と言うたら、「召集令です。」と答えるわけです。召集令なんて今まで出たことがありませんでした。その時はじめは私のところに召集令がきていることがわからず、他のことをしていたのですが、しばらくたってから知り、召集令をもらって受け取りに署名するために、「なんやねん、なんぎやなあ。」と言う母親をたたき起こして、墨をすらせて受け取りを書いたのです。それから中国へ行ったのです。昭和15年2月に日本に帰ってきました。ですから、その間は日本にはおりません。

昭和12年9月初めに盧溝橋において、第20師団に、一級軍装で南下し、石家荘より山西省にある八路軍の根拠地太原を攻略する命令が下りました。山西省随一

の要塞娘子関旧関を攻め、激戦に続く激戦で多数の死傷者が出ましたが、20日間ほどで攻め落としました。

私は旧関の攻撃で進み、昭和12年11月太原総攻撃に参加し、太原より南20里ほどの所にある楡次という町で、太原開城後の昭和13年の新年を迎えました。電気もある町ですが、日本人を見たのは初めてという人ばかりです。ただ、日本品は「ジンタン」の広告と「セイコウ柱時計」がありました。そこでの作戦中のことです。すでに黒砂糖は手に入れてあったので、小豆と餅米を捜しに行き入手して、餅米は炊いて棒で板の上でたたいて、餅にして「新年のぜんざい」を作って祝いました。「ぜんざい」を入れる器に美しい花の図柄がある陶器製の大鉢を用いて、分隊皆で食べました。残ったので、隣に生活している家主の所に持って行きました。すると家主の中国人は笑って「フシン」「フシン」と言って食べないのです。よくよく聞いてみたら、その美しい図柄の大鉢は夜の女性の小便器でした。山西省は零下20度近くなるため室内で男女とも小便をするのですが、男子は桶、女子はその大鉢が便器だったのです。わたしたちはその便器に入れて「ぜんざい」を食べたわけで、苦笑するより、生活の違う中国奥地の山西省の生活ぶりにただ呆気に取られてしまいました。その１月の末に南下し、運城へ進撃したのです。

わたしも戦地へ行っていましたけれども、前線には慰問袋もほとんど来ません。その当時から食糧も来ていませんでした。陸軍はお役所ですから、戦地にいくらいくら送ったと言うかもしれませんが、品物は実際には来ないのです。わたしたちは、慰問団にも、お目にかかったこともありません。しかし、慰問袋を一つだけもらったことがあります。山西省の黄河が回ってくるところにあって、中国で３大にはいる大きな塩の湖で、水を汲んで畠に撒くと勝手に塩ができる湖の畔にある運城にいた時です。軍事郵便も遅く、昭和12年の10月頃出したものが、明くる年の13年の１月に着いたりしていました。

第16師団管轄で朝鮮野砲に入隊した者で、徴収年度昭和３年から８年までの兵が中国に行ったのです。補充兵は一人もいないから、みんな強くて、元気です。行ったところは、共産軍の本拠地です。あの時は閻錫山が全体の責任者で、この間亡くなった鄧小平が陸軍に参戦していました。

わたしが日本に戻るときの様子をお話しましょう。北上して山越しまして、邯鄲というところ、お箏の古曲に「邯鄲の夢」というのがありますが、そこから汽車に乗りました。盧溝橋を通って天津へ入るわけです。そしたらにわかに汽車が止まりました。「みんな降りい。」と言うのです。何故かというと、一晩で鉄道の線路が全部なくなり、探しているのです。その近所の畑や田んぼにみな捨ててしまうのです。線路を拾うだけで３日もかかりました。線路を拾ってきても、わたしたちでは直せないので、鉄道連隊が来て開通しました。帰るのが１週間遅れました。12月のはじめに汽車に乗り、朝鮮に着いたのが元日でした。一か月かかってやっと朝鮮まで帰れました。

そこは日本が一番初めに攻めて取ったところだったのですが、そこにそれだけの敵兵がいたのです。師団がいるところだけは、抑えていますが、それ以外のところには敵が自由に行動できる大国であることに感慨無量の感がありました。そのような中、無事に帰国することができたわけです。

復員してからの生活

わたしが戦地から帰ってくると、嫁さんをもらわないといけないと周りから言われました。当時は娘さんは掃くほどいたわけです。見合いはだいぶしました。甲種ですので、また戦争に行くかもしれないと考えて、後家にしたら可哀想だというので、みんなお断りです。お見合いしてから、３日目ぐらいにみんな相性が悪いと言って断ってくるのです。以前は、甲種合格といったら無条件でもらってくれといっていたのですが、戦争中はそれが逆転しました。わたしは後家になる覚悟をさせて、父親の連れの娘をもらいました。それがわたしの家内です。そして今の長男が生まれました。

帰国後、商いの方は、店に商品を飾ることもあまりできず、徐々に開店休業のような状態になってきていました。そのような時、日彰青年学校の校長さんが「銃剣術やってくれんか。」と言って来ました。わたしは在郷軍人会の副会長でした。だから伊勢で禊をしなければならなかったのです。副会長をやっていることが、徴用のがれになり、助かっていました。そのような理由から、青年学校の先生に誘われたのです。「なんぼくれまんねや。」と聞いたら、「京都市辞令俸給年俸240円」と言われました。しかしわたしは砲兵だったので、銃剣術を武徳会に習いに行き１級の免許を取りました。さらに修身の先生が徴兵になってからは、修身も教えました。年俸は240円でしたが、給料とは別に学区から被服代として毎月30円をくれました。あわせて月給が50円となり、生活費ができました。そういうことで、帰ってきた４月から青年学校の教員

の依頼で修身、教練の教員を引き受けました。教えたのは、夜6時から8時までが週3回で、朝7時から9時までが1回でした。青年学校の辞令は今でも持っています。「おじいちゃんでもこれやぞ。」と言って、今でも時どき孫に見せます。今の娘たちは「おじいちゃん、学校の先生やったん。」と言ってくれます。しかし、生徒が徴用でいなくなって、昭和19年4月にその仕事もなくなりました。

それで、昭和19年の春から、日本電池の九条工場にスパイを捕まえる役として行くようになりました。「45円だすさかい、それにお前さんどうや。」と言ってくれました。昭和19年の6月に再度の召集が来るまでそこに勤めました。スパイを捕まえる役ですので、守衛とは違い、ブラブラしていたらいいわけで、楽でした。一昼夜行って、一昼夜休みでした。

戦地から生還し、何かを一生やらないといけないと思って俳句を本格的に始めました。何故かというと三十四銀行という銀行が、家の向かいにありましたが、そこにいた岩崎宇三郎という人に俳句を教えてもらったのです。銀行は、そのころは冷房がなく扇風機だけでした。わたしの家に井戸があったので、水をもらいに来ていました。またお得意様の新築祝いとか、葬式に行くのですが、その時にご祝儀や香典包みの袱紗を、家に借りに来ました。今のようには銀行も厳しくなく、心安かったのです。宿直の時にも、冷房がないから、暑くて出てくるのです。その時にしゃべって、教えてもらっていました。岩崎さんが本店に転勤になる時に、師匠の水内鬼灯さんを紹介してもらい、それからの水内さんの弟子になりました。それ以来、ずっと今日までやっています。それがやはり頭のボケない理由です。そのおかげで、わたしは今87歳ですが、お話ができるのです。

戦中の箏曲界

私が戻ってきた昭和15年から16年は大東亜戦争（太平洋戦争）のはじまる前で、経済統制もなく商売自体は普通にできていました。しかし、すでにおこなわれていた防空演習、在郷軍人会の会計業務や寄合いなど、次第に戦争の色が濃くなってきていました。当時の旧京都の町には、町籍という町内ごとにまとめられた戸籍のようなものがありましたが、それほど地域の中での人びとの結びつきも強いものでした。「どこの誰々さんが召集された。」という話などは、すぐに近所に伝わったわけです。そのようなご時世の中でお箏をならうという雰囲気は消え、私どものお客さんも次第に減っていったのです。

また、戦争中では、音をあまり出せません。ピアノとか、ギター、バイオリン、チェロなどの外国の弦楽器はだめでした。外国の楽器でも、陸軍はラッパを持っていましたが、音楽隊にある楽器はなにも言われませんでした。箏は日本の楽器ということで、政府からやってはいけないというお咎めはありませんでした。しかし、当道会という京都ではかなり強力な先生の団体があったのですが、わたしが日本に帰ってくる1年前には、一人の先生では弟子の娘さんたちのおさらい会を開くことができなくなりました。それほど生徒の数は減ってきていたのです。

妙なもので、戦争があろうがなかろうが、いいところと悪いところとがあります。軍需品やその関連のものを製造しているところには、いくらでも金があるのです。そのような弟子もいたので、先生も生徒さんがゼロにはならないのです。先生は日に日にお粥ぐらいはすすれていたわけです。金を持っている先生は別で、もう少し余裕のある暮らしをしていたようです。当時の先生は今みたいに免状制で京都市内に看板が出るのとは違いますが、旧京都市内で多くても30人ぐらいの数だったと思います。その中には、田舎に疎開された方も多くいました。今は名簿を見ていると1000人ぐらいはいるようですが。

名古屋や大阪のような工業都市は、戦争が始まったら陸軍御用達みたいなものですから儲かっていました。しかし京都のように手職中心の斜陽産業のところはだめです。京都でも大きな勢いになったのは軍需関連のところです。それらの企業はそれまで畑だったところに工場を建てています。軍に任せて土地を買いとったのです。「ちょっと工場が足りませんので。」と言ったら「どこがええ。」とたずね、「ここがこんだけ。」と答えると、地主に涙ほどの金をやって、その土地を没収です。不景気な呉服屋さんの中には、着物のかわりに軍服や肩章をつくって当座をしのいでいるところさえありました。そういう時代ですから、いいところと悪いところの差は大きかったのです。

そこへ統制経済になったわけです。そうするとマルテイとマルコウとになります。マルテイは仕入れ値を一定にして変えないもので、マルコウは売値を一定にするもので、公定価格です。そのように、商売もますます情勢が悪くなってきたのです。

材料が無くて、箏をつくることが困難になりました。まず最初に統制にあったのは箏の胴部分に用いられる桐の木でした。桐は飛行機のプロペラになります。べ

ニヤにして使うのですが、桐は軽いから回転がいいわけです。それで桐もいっぺんに使えなくなりました。しかし、箏には数年ねかしたものを使用するので、在庫のものがヤミで手に入るのです。しかしヤミですから、公式に箏をつくることはできません。それで、全部古いものとして売るわけです。うちの職人が一人かって山科におりましたが、そこでも古いものとしてつくらしていました。そこで一度ひっかかりかけたことがありました。そこでつくる製品に銘を入れていたのですが、その時に、昭和15年というように年号も入れます。それであやうく引っかかりそうになったのです。それからは銘を入れるのをやめました。

箏や三味線の絃に使う絹糸は落下傘の材料になりましたので、ヤミで手に入れるか、軍が使う余りものを配給でもらうしかないわけです。それでずい分と不自由しました。

箏のお爪や三味線の撥に使う象牙に関しては、軍で使われなかったので、他の材料に比べると、規制はありませんでしたが、戦局の混乱で捕獲手段や輸送手段が滞り、手に入れるのが困難になりました。そこで、清水焼の箏のお爪が考え出され、実際に作り、使われもしました。磁器でつくられ、絃にあたる方にだけ塗料をかけられたものは、意外と良い音がしました。しかし、小さいものなので割れやすく、少し激しい曲を演奏したりするとすぐに壊れてしまう代物でした。

また、猟師も戦争に行ったため、三味線の胴皮に使われる犬や猫を取る人がいなくなったのですが、こんなこともありました。日本クロスという会社で、絹の屑糸を集めて絹皮をつくってもらい、三味線に張ってみたのです。２丁ほど試しましたが、皮が張った後にのびたりして、ついには使える音にはなりませんでした。

箏曲界がいよいよ厳しくなったのは、昭和18年ころ、女学校で勤労動員と称して工場へ行かされるようになってからです。女学校の生徒が勤労動員に行ったら、お稽古に来る生徒がいません。近所の小さい女の子にお稽古しても、親の商いの収入がないので月謝ももらえません。女学校を出た娘さんも、徴用がきたら挺身隊として工場へ行かなければなりませんでした。こうして演奏者が減っていったことが戦中に箏曲界が衰退した一番の原因でしょう。

琴隆会と慰問

そんな時代でも、京都の当道会による琴隆会という箏の演奏会が行なわれていました。会は昭和15年当時すでに出来ていたように思います。先生が自分の生徒は数えるほどしかいないので、個別単位ではおさらい会ができないため、各先生とそのお弟子さんが合同で演奏会を開くのです。それぞれが１曲ずつ出して、くじを引いて順番を決め、全員の曲を持ち寄るかたちで、秋と春と２回、日出会館で演奏会をやりました。食事時に重なるといけないので、１時はじめで４時終わりとか、６時はじめで９時終わりとかでやりました。

琴隆会にはお客さんが男も女も、大勢きました。他に音楽も娯楽もない時代だったからです。それに素人の会だから、無料です。日出会館の方では広報はしていません。看板を出して、ビラを撒くだけでしたが、お客さんはいつも満員でした。通りすがりの人も「聞かしてもらおうか。入場無料やから。」と言って入ってきました。曲目は普通の古曲も宮城道雄や久本玄智の新曲もやりました。地歌で歌詞がよくないといって規制はされませんでした。歌詞が解らなかったからです。「はあーー」と言っていたら解りません。今の歌謡曲みたいにちゃんと歌詞を言っていたら、規制があったかもしれません。

紙がないので本来なら資料はつくれないのですが、それを無理にヤミで調達して、資料をつくりました。お弟子さんにあげられる分ほどはなく、来たお客さんだけに配っていました。日出会館の使用料も安いものです。１曲演奏する人が参加費として５円ぐらい出しました。その当時琴隆会の演奏会に出ていた人で、今でもやっておられる人は、峰内吟彰さんぐらいで、それ以外の人はみんなお亡くなりになりました。

琴隆会はわたしが２度目に戦地へ出た時までは続いていました。箏の会と同じように、尺八も天狗会という会を作って、１曲ずつ持ち寄って、年に１回演奏会を開いていました。

その時のプログラムは、家が強制疎開になりました折に消失し、残っていません。その時親父が82歳で、家は老夫婦でした。近所の人が手伝ってくれましたが、プログラムなどは捨てざるをえませんでした。その時分借家はいくらでもあったので移りました。強制疎開は堀川通りも五条通りも全部そうです。早くから「広うせんなん。」とか、「ここに公園でもしよか。」とか言われていましたが、京都市は戦争を機にやったわけです。今も公園として残されている多くは戦時中に避難場所としてつくられたところです。丸太町から堀川を上がった西堀川が、堀川京極といって、両側ずっと商店街でした。疎開は両方を公平に拡げるわけではなく、東側は残されました。このような強制疎開が始ま

りだしたのは、昭和19年の春ぐらいからです。

慰問に行ったこともあります。伏見にある、今は京都病院になっているところが第16師団の病院ですが、そこは師団の人で埋まっていっぱいでした。今ならどこか病院を抑えられますが、昔は今のように個人や財団の病院はなく、数もあまりありませんでした。その数少ない病院には民間の人が入っていたので、野戦から帰ってきた人を入れる場所がありません。それで、北大路の川端の角を北へ上ったところにカネボウの社宅があったのですが、そこに戦地で傷ついた兵隊さんのための衛戍病院が建てられました。衛戍病院に入っている患者は、内科は結核で、それ以外は外科で怪我人ばかりでした。そこへ慰問に行きました。伏見の本隊の病院には行きませんでした。怪我した兵隊さんが戻っている病院への慰問しかしません。２、３回行ったのを覚えています。

慰問に行くにも、先生より若い娘さんの方が喜ばれました。「わあーっ。」というものです。曲も考えなければなりません。「勝ってくるぞと勇ましく」みたいな、流行歌が好まれました。編曲するのは大変ですから、歌の節にそってべた付けで演奏したわけです。娘さんの中でも声のいい人が歌謡曲式に歌うのです。

病院以外のところへは慰問に行きません。戦地まで慰問に行くことは、とてもできませんでした。

２度目の戦地と捕虜・引き揚げ

昭和19年６月20日に２度目の召集があり、今度は華中に行きました。

「西部戦線異常なし」という、ドイツが第1次世界大戦で負けた時の映画を見て、「はじめてこれ、そやなあ。」と思いました。足をやられてもそのままです。けが人があっても縄くくりです。縄から落ちた奴はもう「さいなら。」です。わたしも戦場で怪我をしましたが、自分で治しました。

華中から華南に行くところに衡陽というところがあります。それも相当大きな都会です。中国では25丁ほどが１里ですが、衡陽から百里ほど行くと宝慶というところがあります。そこから、雪峰山脈を越え、日本を爆撃する本拠地になっている芷江を攻略する芷江作戦にわたしも参加しました。中国人がなにも持たないでその山脈を越えるのに、４日間かかるといわれています。それを戦争しながら越えろという命令でした。戦時は一個師団で２万人ですが、乙師団の場合は１万５千人です。その１万５千の兵力で攻める命令でしたが、とてもそのようなところではないのです。中国側は日本軍が川を渡るのを待っていたのです。河を渡ったところで、兵隊も馬も食糧もやられました。日本軍は旧式の兵器でしたが、中国軍はチェコ製の最新の兵器で武装していました。さんざんやられて、多くの戦死者を出し、半分以下の５千人ぐらいの兵力になってしまいました。しかも昼間はアメリカの飛行機が来るため、出られないのです。夜では食糧を徴発できません。それでもうみんなふらふらで、へとへとになりきっていました。そこからまた百何十里歩いて宝慶まで退却したところで終戦を迎えたのです。

終戦になったのは昭和20年８月15日ですが、無線で連絡が来たのは17日でした。陣地より一昼夜かけて大隊本部に命令を受けに行きました。「朕はなんたら・・・」と言って、いままでお目にかかったことのない言葉ばかりでした。それで、さっぱり解らないので、中隊長に怒られました。とにかく戦争は終わりました。「それやったらスイスかどっかが仲裁にはいったんやなあ。」と言っていました。それで「スイスか、ほんなら和解やな。」と言って、牛などを引き連れて揚子江へ向かったのです。

揚子江上流に岳州というところがありますが、ここは岳州楼という有名な城楼があるところです。そこから中国の里数で10里ほど南の栄加湾というところまで来た時に中国軍に囲まれて、捕虜になりました。昭和21年まで栄加湾のお寺が収容所がわりになっている所に入れられ、労役を強いられました。捕虜中に、疥癬にやられました。その疥癬の黒いあざが今でも残っています。あれは取れません。捕虜中は薬がありませんでしたので、中国の電灯のソケットに入っている硫黄を盗んで治療に使いました。２度目の野戦の時に作った句帖があります。表紙は米の袋です。紙は中国で徴発したものです。鉛筆書きでかろうじて残っています。これと時計が捕虜から帰ってきた記念品です。

５月５日に帰国命令が出て、上海に移り、そこから船で博多に向かいました。しかし傷病人は一緒に帰ることができないで、中国に残されました。船が博多湾に入ってから、船中に伝染病患者がいるので隔離するという理由で、１か月間ぐらい止められました。やっと８月になって博多への上陸が許されました。

軍隊が解散する前の晩の、夕方から夜にかけては大騒動でした。もう一生会わない者ばかりです。階級がなくなっていますから、これまで威張って殴っていた准尉らを、２階から蹴飛ばして落とすのです。それまでは上官だから殴られていましたが、今は力の強い奴が勝つのです。落とされた３、４人は怪我をしました。

わたしは口やかましいけれども、手は出しませんでしたから、「大阪帰る奴はおれのところ寄っていけよ。」と言いましたけれども、だれも殴る者はいませんでした。しかし、終戦前にですが、わたしが一回中隊を変えさせられた時、その元の中隊の者にやられたことはありました。

年数からいいますと、それだけ長い間野戦にいたら准尉か曹長ぐらいになるのが普通ですが、わたしはおべんちゃらを使わなかったものですから、伍長で下士官どまりでした。

戦後の箏曲界

昭和21年に日本に戻ってからは、再び箏屋の商売に戻りました。一番驚き、喜ばしかったのは、終戦になったことで自由にやれる風潮になり、箏曲界も活気を取り戻したことです。そして楽譜が普及したことは箏曲を新しい器楽曲としての可能性を広げ、演奏者人口を一気に増やし、箏の先生も業者も勢いづきました。また、爪使いやジェスチャーなど技術面での進歩は楽譜のおかげといえましょう。しかし、その反面で、個性のある演奏、本当に力のある演奏がなくなってきたのも否めません。楽譜に頼ってしまうからです。その分じっくり時間をかけて修業をする人があまりいません。楽譜には同じ型しか書かれておらず、その曲の本来持つ個性や、厳しい修業をしてこそ感じ取れる微妙な肌合いは出なくなりました。歌もただ楽譜に書いてあるように上げたり下げたりして歌っているだけで、力がありません。古典の演奏に対して特にそう感じてしまいます。このように戦後の楽譜の普及は箏曲界にとって功罪両側面があるのではないでしょうか。

このごろは、現代音楽でも古典音楽でもクラシックでも力がないように思います。西洋音楽でも世界大戦の影響は少なくないといえるでしょう。音楽にしても何にしても力を感じさせないと、魅力がありません。しかしこれは全般何にでもいえます。わたしは60年近く俳句をやっていますけれども、最近の俳句を見ても、力がないように思います。

能楽について少しいえば、京都の能楽家は優秀な若者が戦死しました。生きていたら、皆おそらく芸達者なすばらしい演者になっていたにちがいありません。能楽界では、演者が男でしたから戦死者が出ましたが、箏の方はそういう面はありませんでした。

しかし、箏曲界でも戦争は、別の面で今日まで響いているといえます。戦争がなければ戦前の先生の厳しい教え方は今も続いてきたでしょうが、終戦直後は配給も十分でなく、先生も生きていくのが必死の時代でしたから、まだ数少ない生徒をつなぎとめるためもあり、お稽古のやり方は大きく変わりました。その時分にそうとう鍛えられた方は別ですが、そうでない方もたくさんいます。

昔の明治から昭和初期までの名手のお稽古の仕方と、戦後の仕方はやはり違います。そこへ楽譜が普及してきたからなおさらです。戦前は歌詞だけ書かれたものはありましたが、楽譜では教えず、口伝によるものでした。譜面らしきものはありましたが、忘れたらパッと見るためだけでした。

これはわたしが丁稚時代のお話です。ある先生のところに仕事で行った折に、稽古場にものさしが置いてありました。「この先生、お針も教えているのだなあ。」と思って、家へ帰ってから「あの先生お針の先生もしてはるんか。」と聞いたら、「そんなことあれへん。」と言います。それでも「２尺さしがある。」と言ったら、「それは稽古していて忘れはったら、それでビシッと叩くんや。お弟子はんは素人ばっかりやけど、素人でも忘れたら、バアンやりよるんや。」と教えてくれました。それは私が14、5歳の時です。素人でもうまい人が大勢いました。それだけの芸を教えてもらうために、月謝を持ってきたわけです。月謝の値打ちだけは教えなければならないという精神の先生が多かったのです。

その流れは、もはやほとんど消えてなくなりました。

最後に

何といっても戦争中の箏曲はほとんど壊滅状態でした。しかしながら、ヤミの商売や御用達で景気がよいところもありましたから、先生によってはいい弟子を持っている方もいました。今の時代においても、不景気といっても、いいところも悪いところも両方あります。これはいつの時代でも同じです。

（談　箏屋「琴伝」の先代の当主）

（2000年９月13日、於琴伝）